# 釋迦如來五百大願經の成立

成田貞寛

## 一

平安期末から鎌倉期初頭にかけて南都諸師の間に於ては、時と機根に對する反省自覺が深められると共に、未だ曾つて見ざる傳統教學の域を脱して、獨自なる教學の自己形成がなされて行くのであるが、その根源に悲華經所說の菩薩行願の思想が受容せられていることは、時代的に見て極めて注目すべきことである。[1] かゝる菩薩道の實踐をその教學の中に受容せることは、云はゞこの時代の特色であり、鎌倉佛教としての共通の地平の上に、自己の教學を築きあげたものとして、特筆されねばならぬと共に、中世社會の激變する中で、時代の要請に應えてあるべき人倫的社會の形成に向つて、その使命を果したものとして、その意義を認めねばならぬと思ふ。

さて、釋迦如來五百大願經上下二卷本なるものは、京都高山寺所藏にかゝる古寫本にして、筆者は帙に記載される智滿の識語によれば、承久三年六月、濃州、洲股の戰で戰死せる檢非違使山田重忠の妻にして、夫戰死の後、明惠上人に從つて薙染せし明行尼[2]によつて書寫されたものであることが明かである。奥書には、

「嘉禎三年從三月廿二日始、於舍利御前每字香華供養、以一字一禮儀、刺血和墨同五月廿六日午時許書寫畢。心中本願應有佛智也。比丘尼明行。上下書寫日數五十日也。」

と明行尼の自筆によつて記されているから、戰死せる夫えの供養と釋迦如來の本願の益にあづかり佛智を開かしめられんとの深き念願から書寫されたものと思はれる。その内容は、後に詳述するが如く、釋迦如來過去世に寶海梵志と言える時、寶藏佛の御前に於て五百の大誓願をおこし、菩薩道を行じ惡世に成佛せることを說く悲華經十卷（曇無讖譯）の中、第六卷より第八卷に亘る所を別行拔粹し、增補改變して成立せるものである。卽ち悲華經第七卷の滅後利益を明す項の末尾には、「五百の誓願を作し已る」、と記されてはいるが、その誓

願の數は形式の上からは五百條に規定されているわけではない。しかるに本經（高山寺本）には諸誓願を基として五百條に區切り、各條文の前後に「我れ未來に菩薩道を行ぜん時……若し爾らずんば正覺を成ぜず」等と願文に相應せる文を附して個條書にし、更に文意の足らざる所は他の經文から引用補充し、或は前後の文意を勘案する等して、正しく五百條に具足構成せるものである。卽ち、第四十七願文の末尾には、

「己上二十願於二無佛世一、現二異類身一行二菩薩道一。經文略說乃至兎身云。依二他經文一分立之。」

と說いて願文の意を說明すると共に願數を調えるために他經の文によつて補充していることが知られる。（二十願の中、四天王身、諸夜叉身、乾闥波身、阿修羅身、緊那羅身、摩睺羅伽身、執金剛神、威德大神身、諸鬼神身、五通仙身、師子等身の十一願は他經より補足せるものである。）又第百六十六願文の末尾には、

「己上八願經文云、於娑婆世界諸四天下一時之中、從兜率天下現處毋胎乃至童子學諸伎藝出家苦行破魔成道轉法輪入涅槃流布舍利如是示現悉皆遍滿百億四天下文、今以取意分立之。己上第六卷有百五十六願矣。」

第三百三十八願文の末尾には

「己上十五願、經文只云乃至有求解脫之取意分立之。」

第四百九十八願文の末尾には、

「己上二十七願、經文只云、我涅槃後若有衆生於我法中、乃至一戒一四句偈乃至一花一香以二是因緣一隨二其志願一於二三乘中一各不二退轉一。今取意分立之。」

第四百三十九願文の末尾には、

「己上二十六願、經文雖レ不二分明一、勘前後分立之。」

第四百七十八願文の末尾には、

「己上二十五大願、經文云我之所有布施持戒等善、皆爲二地獄一切衆生一墮二阿鼻地獄一、以二是善根一當拔濟之。乃至阿修羅迦樓羅等皆亦如是。依安次第分立之。」

と說いて願文の數を調えるについて、共に經文に乃至とある所は經の文意をくみ取つて、願文を分立し、又經文の前後の文意を勘案して願數を調える等、種々の作意が施されていることが知られる。亦第六卷には百六十六願文、第七卷には三百七十願文、第八卷には十七願文、夫々以て構成せることが知られる。

## 二

しからば、かゝる形に何時頃構成せられたであらうか。この事については既に指摘されてはいるが[3]、吾人としては、解脫上人が造像の初から關係したと思はれる、峯定寺藏釋迦如來像の納入文書[4]、十三點の中、菩提樹葉片に書かれた牟尼阿彌陀佛の願文には、「本師釋迦牟尼如來の五百の大願、一々に成就するが如くせん。」との結緣の語が記されているから、

納入文書の日付が正治元年（一一九九年）六月十日となつている所よりすれば、この時既に五百條の大願經として成立していたことが知られる。勿論、悲華經中諸菩薩本授記品の文がそれより以前に諸書に引用され注目されていると思はれるから、それより更に年代を逆上ることも可能であるが、ともあれ、この頃漸く盛になつた淨土彌陀信仰に刺戟され、更に極言すれば、その本願思想に對抗して強調せられ成立したものと思れるが、時代觀としては四劫觀に立つて、この世を賢劫五濁の末と規定せる平安末期の人師によつて構成せられ成立せしめられたものと思はれる。

さて、從來この經典のこの部分に限つて考察し、特に願數、願名、願文の內容規定等について考察したものは、極めて稀であると思はれるが、唯一つ戰國期から德川初期にかけて活躍せる釋良定の五百誓願略經私記なるものがある。(5) 彼は獨自の立場から願數を規定し、願名を附し、その內容に隨つて分類規定せんとするにあたり次の如く說いている。

「將レ釋二此願文一。大分爲レ三。一、釋二名字一。二釋二願數一。三分レ文矣。一名字者經無レ文。今凡取二其意一爲レ名。但取二文中字一。若願文分明者。有レ加二他字一。二、釋二願數者。經中云二五百誓願一。今見亂行句讀不レ明。故輙難レ辨。任二愚才一爲レ數。凡三百三十五願矣。近見二古鈔一彼亦泥二願數不足一、或經取レ意、或他經意而五百滿足矣。不レ應二愚意一。故不レ取。三、分レ文者、大分爲レ七。一、明二修行六度一。二、明二八相一。三、明二滅度利益一。四、重濟二獄苦一。五、現前請レ瑞。六多衆結緣。七、生生利益矣。」

以上によつて明かなる如く、初め經名について說いているが、經に文なしと云い、文中の字を取るとて五百の誓願なる文を取つて名となし、次いで願文の數について說く中、古鈔を見るに願數の不足になずんで他經の意によつて五百條滿足する旨を說いている所を見ると、五百條に區切つた高山寺本と同系統のものを參照していたと推測される。しかして彼としては願數を三百三十五願とし、その一々に願名を附しているが、願文を構成するに當つても高山寺本とは異り、廣い範圍から取り來たり、菩薩本授記品のみでなく、次の檀波羅蜜品の中からも三十願を構成し、願文を立てゝいる點、高山寺本とは異つていると云はねばならぬ。亦、願文全體を內容に從つて、七項目に分類しているが、願文を示す形式は、只願名を示すに止まり、高山寺本の如く前後に文を附してまとまれる一文にしているのではない。その文中の主要熟語について多くの經典の文を引用して解釋說明を加え、或は又、內容分類の規定について說明を加える等、よく文意を取つて說明されているだけである。高山寺藏釋迦如來五百大願經を理解する上に於て極めて重要なる資料である。

## 三

さて、本經の構造を見るに、先づ前文の部分と五百條の誓願文より構成されている。前文は先づ寶海梵志の思惟發願に始まる。即ち、「我今已に無量無邊の衆生にすゝめて阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ、我今この諸の大菩薩達を見るに、各々願をおこし、淨き佛土を取る、この賢劫の中に於てその他の菩薩も亦五濁を離る。我今當にこの末世に於て眞の法味を以て諸の衆生に與えん。我れ今當に自ら堅牢にし莊嚴して、諸の善願を作すこと獅子吼の如く、悉く一切の菩薩をして聞き己つて心に疑怪を生じ未曾有と歎ぜしめん。亦一切の大衆天龍鬼神等をして我を恭敬し供養せしめん。佛世尊をして我を稱讃し記別を授けしめん。十方無量無邊の在々處々の現在の諸佛、諸の衆生のために正法を講說し、彼の諸の如來をして我が獅子吼を聞き、悉く讃歎して我に菩提の記を授けしめん。亦使を遣はし來り給ふを諸の大衆をして悉くこれを見るを得しめよう。我れ今最後に大誓願を發し、菩薩の凡ゆる大悲を成就し乃至阿耨多羅三藐三菩提を成じよう。」梵志の以上の思惟發願に對し、無量百千萬億の諸天、一切の大衆、梵志を敬禮し讃歎して、「我等今願くは尊意發す所の善願を聞かん」と勸請するのである。そこで梵志は佛を讃歎し、自ら惡世に於て諸忍を修め諸の煩惱賊と鬪い、無量の一切衆生を拔出し寂滅の道の中に安止して住せしめんことを決意すると共に、再び佛に對し反問するのである。即ち、「我れ已に無量億の衆生を教化して、菩提心をおこさしめ、この諸の衆生は各々願つて淨妙の世界を取り不淨土を離れ、清淨の心を以て諸の善根を種え、善く衆生を攝して調伏す。如來已にこの諸人等のために賢劫の中に於て、當に成じて佛となるべしと記別を授けられた。しかるに、凡ゆる衆生は貪婬瞋癡憍慢を行い、悉く當に三乘の中に調伏すべく、一千四佛の放捨する所の者である。よつて惡業を行い諸佛世界の容受せざる所である。擯けられてこの世界に集り來つているその時、娑婆世界は賢劫の中、人壽千歲であり、一千四佛は大悲成ぜざれば、かくの如き弊惡の世を取らず、諸の衆生をして生死に流轉せしめ、救護あることなく、諸の苦惱を受くるをかえつて捨て放つて、各々願つて淨妙の世界を取つておりますがそれに相違なきか。」と疑惑反問するのである。これに對し世尊はかくの如き事の相違なきことを是認せられるのである。こゝに於て梵志は佛の御前に改めて立誓決意を表白するのである。「諸の菩薩は大悲を生ずと雖も、五濁世を取ること能はず。今諸の衆生は癡の闇黑に墮している。世尊よ、來世一恒河沙の阿僧祇を過ぎ、第二の恒河沙の阿僧祇劫に入り、後分の賢劫の中、人壽千歲の時にあたり、菩薩道を行じ久しく生死にありて諸苦を忍受せん。菩薩の三昧力を以ての故に、要らずまさにかくの如きの衆生を捨てざるべし。世尊よ、我れ今自ら六波羅蜜を行じ衆生を調伏せん。」以上が前文の大要であ

るが、こゝに梵志の五百條の誓願を說くに至る原由を語る共とに、悲華經の趣意を說いていることが知られる。

次に五百條の誓願文の內容についてであるが、先にも一言せる如く、略經私記には大分して七項目に分類している。[6] しかも一々の願文についてはその意を取つて願名を附しているが、勿論願文の構成仕方については、本經（高山寺本）と異なり廣範圍からこれを取つているから、兩者を對照しても、略經私記に願名を立てゝいても、本經に該當するもののない場合もあり、又本經に一箇條を立てゝいても、略經私記に該當する願名を見出せない場合もある。又本經の數箇條乃至二十五箇條を以て、略經私記の一願名に包括される場合もある。交互に廣略があるからである。さて、五百の誓願文全體の內容を分類規定する場合、一應、略經私記に從うことが妥當かと考へるからこれに從い、一々の個條について、適切な願名を附することは極めて困難ではあるが、今は試みに略經私記を參考としながら、次に列記して見よう。

第一項、明二修行六度一。

第一願、檀度利益願。第二願、不求果報願。第三願、布施過量願。第四願、檀度勝他願。第五願、數劫行檀檀度相續願。第六願、修行戒度願。第七願、修行忍辱願。第八願、修行精進願。第九願、修行禪定願。第十願、修行慧度願。第十一願、過去未來慧度願。第十二願、開示大悲願。第十三願、不著六度願。第十四願、濟度重罪願。第十五願、自代地獄苦願。第十六願、自代畜生苦願。第十七願、自代餓鬼苦願。第十八願、自代貧窮鬼神苦願。第十九願、自代卑賤人中願。第廿願、種他善根願。第廿一願、不欣世樂願。第廿二願、自行供佛願。第廿三願、爲他供佛願。第廿四願、於佛得功德願。第廿五願、令住無上菩提願。第廿六願、令住緣覺菩提願。第廿七願、令住聲聞菩提願。第廿八願、作仙結緣願。第廿九願、變身摩醯願。第卅願、變身八臂願。第三十一願、化日天子願。第三十二願、化月天子願。第三十三願、化梵天身願。第三十四願、化天帝釋身願。第三十五願、金翅鳥身願。第三十六願、四天王身願。第三十七願、諸夜叉身願。第三十八願、乾闥波身願。第三十九願、阿修羅身願。第四十願、緊那羅身願。第四十一願、摩睺羅伽身願。第四十二願、執金剛神身願。第四十三願、威德大神身願。第四十四願、諸鬼神身願。第四十五願、五通仙身願。第四十六願、師子等身願。第四十七願、兎身敎化願。第四十八願、身與飢餓願。第四十九願、代罪救護願。第五十願、利益大惡願。第五十一願、賢劫利益願。第五十二願、得見諸佛願。第五十三願、化益多佛願。第五十四願、見他方佛願。第五十五願、諸法利益願。第五十六願、調伏鈍根願。第五十七願、自在佛事願。第五十八願、恭敬讚歎願。第五十九願、諮問出家法願。第六十願、正法攝取願。第六十一願、當作佛事願。第六十二願、迦葉佛恭敬願。第六十三願、再諮問出家

法願。第六十四願、再正法攝取願。第六十五願、重當作佛事願。第六十六願、千歳利益願。

第二項、明二八相示現一。

第六十七願、生天利益願。第六十八願、令趣三乗願。第六十九願、再令趣三乗願。第七十願、大悲教化願。第七十一願、令住三乗菩提願、第七十二願、再令住三乗菩提願第七十三願、再大悲教化願。第七十四願、下天利益願。第七十五願、入胎放光願、第七十六願、令見光明願。第七十七願、種涅槃根栽願。第七十八願、處胎撰擇願。第七十九願、空門功德願。第八十願、出胎利益願。第八十一願、正受思惟願。第八十二願、從右脇生願。第八十三願、生時振動願。第八十四願、出胎光明願。第八十五願、見光覺醒願。第八十六願、涅槃善根願。第八十七願、蹈地振動願。第八十八願、五道得菩薩願。第八十九願、令得三昧願。第九十願、異生供養願。第九十一願、尋行七歩願。第九十二願、選擇功德願。第九十三願、令生歡喜願。第九十四願、意樂聲聞願。第九十五願、意樂緣覺願。第九十六願、意樂大乗願。第九十七願、誕生洗濯願。第九十八願、令住三乗願。第九十九願、示現童子願。第百願、伎術希有願。第百一願、在家受樂願。第百二願、示現娛樂願。第百三願、夜半出家願。第百四願、令發道心願。第百五願、道場袈裟願。第百六願、令住正法願。第百七願、已發三乗願。第百八願、受草趺坐願。第百九願、繫念三昧願、第百十願、食米施殘願。第百十一願、聞苦供養願。第百十二願、諸衆證明願。第百十三願、心得寂靜願。第百十四願、緣覺種善根願。第百十五願、大乗種善根願。第百十六願、外道歸依願。第百十七願、住三乗不退地願。第百十八願、貴賤供養願。第百十九願、貴賤安住三乗願。第百二十願、受女人供願。第二十一願、女人安住三乗願。第百二十二願、不轉畜生身願。第百二十三願、禽獸令住三乗願。第百二十四願、小虫令安住三乗願。第百二十五願、遠劫證明願。第百二十六願、苦行勝過願。第百二十七願、苦行勝現顧。第百二十八願、苦行勝未願。第百二十九願、超過三世願。第百三十願、樹下降魔願。第百三十一願、殘業報身願。第百三十二願、聞名入菩薩地願。第百三十三願利益神通願。第百三十四願、隨時說法願。第百三十五願、破衆煩惱願。第百三十六願、施無所畏願。第百三十七願、無鄣出家願。第百三十八願、女人大戒願。第百三十九願、供養四衆願。第百四十願、異類授諦願。第百四十一願、異類八戒願。第百四十二願、殘害忍受願。第百四十三願、誹謗忍受願。第百四十四願、殘業悉受願。第百四十五願、濟度怨賊願。第百四十六願、天上障盡願。第百四十七願、衆生業盡願。第百四十八願、化佛利益願。第百四十九願、化佛遣至願。第百五十願、化佛濟惡願。第百五十一願、隨類化身願。第百五十二願、變形利益願。第百五十三願、現形說法願。第百五十四願、聞讚生人願。第百五十五願、臨終利益願。第百五十六願、惡道生

人願。第百五十七願、轉彼邪心願。第百五十八願、他逆引來願。第百五十九願、生兜率天願。第百六十願、下生利益願。第百六十一願、說法利益願。第百六十二願、作童子形願。第百六十三願、苦行利益願。第百六十四願、破諸魔王願。第百六十五願、轉正法輪願。第百六十六願、流布舍利願。第百六十七願、轉法輪相願。第百六十八願、得知聲聞願。第百六十九願、得解緣覺願。第百七十願、解了大乘願。第百七十一願、聞法捨財願。第百七十二願、聞法持戒願。第百七十三願、聞法慈心願。第百七十四願、聞法悲心願。第百七十五願、聞法喜心願、第百七十六願、聞法捨心願。第百七十七願、得不淨觀願。第百七十八願、得身念所願。第百七十九願、論議不慢願。第百八十願、得陀羅尼願。第百八十一願、解法空門願。第百八十二願、解無相法願。第百八十三願、解無願法願。第百八十四願、心得清淨願。第百八十五願、離多緣心願。第百八十六願、解眞實相願。第百八十七願、法無依倚願。第百八十八願、愛染離心願。第百八十九願、得日光定願、第百九十願、離諸魔業願。第百九十一願、增益正法願。第百九十二願、解了煩惱願。第百九十三願、惡道回反願。第百九十四願、遮邪歸正願。第百九十五願、菩薩生死願。第百九十六願、覺了善法願。第百九十七願、隨喜善根願。第百九十八願、無閡光明願。第百九十九願、離惡業報願。第二百願、不怖大衆願、第二百一願、楞嚴三昧願。第二百二願、見諸光明願。第二百三願、捨憎愛心願。第二百四願、幢相三昧願。第二百五願、法炬三昧願。第二百六願、日燈三昧願。第二百七願、功德應辯願。第二百八願、觀色堅固願。第二百九願、決定三昧願。第二百十願、須彌幢定願。第二百十一願、金剛三昧願。第二百十二願、了達道場願。第二百十三願、得壓離心願。第二百十四願、得他心通願。第二百十五願、得知利鈍願。第二百十六願、解了音聲願、第二百十七願、解了諸身願。第二百十八願、不詢三昧願、第二百十九願、無諍三昧願、第二百二十願、不疑法輪願。第二百二十一願、隨順因緣願。第二百二十二願、善別佛土願。第二百二十三願、種相善根願。第二百二十四願、解了言音願。第二百二十五願、法界三昧願。第二百二十六願、不退轉法願。第二百二十七願、得大智慧願。第二百二十八願、不失誓願願。第二百二十九願、一道無別願。第二百三十願、得無所有願。第二百三十一願、得波羅蜜願。第二百三十二願、得四攝法願。第二百三十三願、平等慈心願。第二百三十四願、住不出世願。第二百三十五願、智印三昧願。第二百三十六、決定三昧願。第二百三十七願、聞法不志願。第二百三十八願、得淨慧眼願。第二百三十九願、得信三寶願。第二百四十願、法雨三昧願。第二百四十一願、離斷滅見願。第二百四十二願、智慧三昧願。第二百四十三願、不縛煩惱願。第二百四十四願、離我我所願。第二百四十五願、得世間解願。第二百四十六願、得諸變化願。第二百四十七願、解諸法同願。

第二百四十八願、選擇諸經願。第二百四十九願、解六和敬願。第二百五十願、懃解脫法願。第二百五十一願、入如來藏願、第二百五十二、智慧懃行願。第二百五十三願、見本生住願。第二百五十四願、受記三昧願。第二百五十五願、無壞三昧願。第二百五十六願、得四無畏願。第二百五十七願、得不共法願。第二百五十八願、願句三昧願。第二百五十九願、得鮮白淨願。第二百六十願、善了三昧願。第二百六十一願、成就佛事願。第二百六十二、聞法信解願。第二百六十三願、菩薩得諸法願。第二百六十四願、菩薩得三昧願。第二百六十五願、菩薩得陀羅尼願。第二百六十六願、菩薩不退願。第二百六十七願、相好莊嚴願。第二百六十八願、隨相好嚴身願。第二百六十九願、妙音莊嚴願。第二百七十願、定心莊嚴願。第二百七十一願、想念莊嚴願。第二百七十二願、善心莊嚴願。第二百七十三願、專心莊嚴願。第二百七十四願、布施莊嚴願。第二百七十五願、持戒莊嚴願。第二百七十六願、忍辱莊嚴願。第二百七十七願、精進莊嚴願。第二百七十八願、禪定莊嚴願。第二百七十九願、智慧莊嚴願。第二百八十願、慈心莊嚴願。第二百八十一願、悲心莊嚴願。第二百八十二願、喜心莊嚴願。第二百八十三願、捨心莊嚴願。第二百八十四願、諸通莊嚴願。第二百八十五願、功德莊嚴願。第二百八十六願、知心莊嚴願。第二百八十七願、意樂莊嚴願。第二百八十八願、光明莊嚴願。第二百八十九願、諸辯莊嚴願。第二百九十願、無畏莊嚴願。第二百九十一願、得佛功德願。第二百九十二願、說法莊嚴願。第二百九十三願、佛光莊嚴願。第二百九十四願、照明莊嚴願。第二百九十五願、他心莊嚴願。第二百九十六願、教誡莊嚴願。第二百九十七願、神足莊嚴願。第二百九十八願、法藏莊嚴願。第二百九十九願、善法莊嚴願。第三百願、說一句法願。第三百一願、成就大法願。第三百二願、廣說法門願。第三百三願、令得正見願。第三百四願、廣說法聚願。第三百五願、廣說六度願。第三百六願、安止三歸願。第三百七願、安止不殺願。第三百八願、安止不盜願。第三百九願、安止不婬願。第三百十願、安止不妄願。第三百十一願、安止不酒願。第三百十二願、受持五戒願。第三百十三願、受持八戒願。第三百十四願、安止十戒願。第三百十五願、梵行大戒願。第三百十六願、開示五陰法門願。第三百十七願、開示十二入願。第三百十八願、開示十八界願。第三百十九願、令入正見願。第三百二十願、得入正道願。第三百二十一願、安止無我法願。第三百二十二願、安止無畏涅槃願。第三百二十三願、正法論義願。第三百二十四願、令住五神通願。第三百二十五願、宣說和伽羅經願。第三百二十六願、宣說阿浮陀經願。第三百二十七願、宣說修多羅經願。第三百二十八願、宣說祇那正教願。第三百二十九、宣說伽陀正教願。第三百三十願、宣說優陀那正教願。第三百三十一願、宣說毗尼正教願。第三百三十二願、宣說和多伽正教願。第三百三十三願、宣說諸譬喻經願。第三百

三十四願、宣說種々因緣願。第三百三十五願、宣說十二頭陀願。第三百三十六願、宣說甚深正教願。第三百三十七願、教示空理願。第三百三十八願、說空無論願。第三百三十九願、營左衆事願。第三百四十願、示正解脫願。第三百四十一願、教化正道願。第三百四十二願、種々方便願。第三百四十三願、示現神足願。第三百四十四願、放大光明願。第三百四十五願、現諸瑞相願。第三百四十六願、震動世界願。第三百四十七願、現諸音樂願。第三百四十八願、雨諸天花願。第三百四十九願、大海入芥子願。第三百五十願、現諸佛國土願。第三百五十一願、常行乞食願。第三百五十二願、示現涅槃願。第三百五十三願、入滅減壽願。第三百五十四願、求般涅槃願。

第三項、明二滅後利益一。

第三百五十五願、正法千歲願。第三百五十六願、像法五百歲願。第三百五十七願、珍寶供養舍利願。第三百五十八願、伎樂供養舍利願。第三百五十九願、歌舞供養舍利願。第三百六十願、歌唄舍利願。第三百六十一願、衣服供養舍利願。第三百六十二願、飲食供養舍利願。第三百六十三願、塔廟供養舍利願。第三百六十四願、勸人供養舍利願。第三百六十五願、供養舍利隨喜願。第三百六十六願、讚歎舍利願。第三百六十七願、妙花供養舍利願。第三百六十八願、妙香供養舍利願。第三百六十九願、禮拜舍利願。第三百七十願、右遶舍利願。第三百七十一願、散於舍利願。第三百七十二願、供養三寶願。第三百七十三願、彫畫佛菩薩像願。第三百七十四願、聚砂爲塔願。第三百七十五願、畫諸佛像願。第三百七十六願、衣服臥具供養三寶願。第三百七十七願、花香供養三寶願。第三百七十八願、歌唄三寶願。第三百七十九願、花供養三寶願。第三百八十願、善心一禮三寶願。第三百八十一願、珍寶衣服施衆生願。第三百八十二願、飲食施貧窮願。第三百八十三願、食施有情虫類願。第三百八十四願、受具足戒堅持願。第三百八十五願、受十重戒堅持願。第三百八十六願、受五戒堅持願。第三百八十七願、受八齋戒堅持願。第三百八十八願、受一戒食堅持願。第三百八十九願、忍受諸苦願。第三百九十願、忍不致報願。第三百九十一願、勤修佛事願。第三百九十二願、攝念坐禪願。第三百九十三願、解說大乘願。第三百九十四願、受持一四句偈願。第三百九十五願、供養一四句偈願。第三百九十六願、令聽教法願。第三百九十七願、供養法師願。第三百九十八願、一禮三寶願。第三百九十九願、舍利不滅願。第四百願、舍利出現願。第四百一願、舍利雨花曼陀羅願。第四百二願、舍利雨諸妙花願。第四百三願、舍利出三歸依聲等願。第四百四願、舍利出布施聲等願。第四百五願、舍利出讀經聲等願。第四百六願、舍利出八勝處聲願。第四百七願、舍利雨諸華願。第四百八願、舍利化作珍寶願。第四百九願、無諸鬪諍願。第四百十願、除諸貧苦願。第四百十一願、無諸病苦願。第四百十二願、無諸災難願。第四百十三願、舍利至本住處願。

第四百十四願、舍利治兵願。第四百十五願、舍利雨曼陀羅花願。第四百十六願、舍利出佛聲等願。第四百十七願、舍利出妙聲願。第四百十八願、舍利放五色光願。第四百十九願、舍利出諸珍寶願。第四百二十願、舍利國土安穩願。第四百二十一願、舍利諸惡消滅願。第四百二十二願、舍利至本住處願。第四百二十三願、舍利變作佛事願。第四百二十四願、舍利放種々光願。第四百二十五願、舍利雨華香願。第四百二十六願、舍利出妙音願。第四百二十七願、舍利出珍寶願。第四百二十八願、舍利出妙藥願。第四百二十九願、舍利國土安寧願。第四百三十願、舍利不散滅願。第四百三十一願、舍利從地出現願。第四百三十二願、舍利放光明願。第四百三十三願、舍利雨妙華願。第四百三十四願、舍利出妙音聲願。第四百三十五願、舍利出諸珍寶願。第四百三十六願、舍利出百味願。第四百三十七願、舍利世界安穩願。第四百三十八願、舍利令入佛道願。第四百三十九願、舍利作大利益願。第四百四十願、舍利廣益願。第四百四十一願、舍利久住願。第四百十二願、皆得成佛願。第四百四十三願、令安住勝果願。第四百四十四願、擧後因緣願。第四百四十五願、令得成正覺願。第四百四十六願、說其本緣願。第四百四十七願、隨求授記願。第四百四十八願、舍利遠益願。第四百四十九願、舍利大師願。第四百五十願、擧後利益願。

第四項、重願レ濟二度獄苦一。

第四百五十一願、諸願不滿誓。第四百五十二願、重誓不滿願。第四百五十三願、捨自利他願。第四百五十四願、結緣地獄願。第四百五十五願、出阿鼻地獄生人天願。第四百五十六願、入阿鼻地獄代受苦願。第四百五十七願、處地獄代受苦願。第四百五十八願、出大燒熱地獄生人天願。第四百五十九願、入大燒熱地獄代受苦願。第四百六十願、出燒熱地獄生人天願。第四百六十一願、入燒熱地獄代受苦願。第四百六十二願、出大廬獦地獄生人天願。第四百六十三願、入大廬獦地獄代受苦願。第四百六十四願、出廬獦地獄生人天願。第四百六十五願、入廬獦地獄代受苦願。第四百六十六願、出衆合地獄生人天願。第四百六十七願、入衆合地獄代受苦願。第四百六十八願、出黑繩地獄生人天願。第四百六十九願、入黑繩地獄代受苦願。第四百七十願、出等活地獄生人天願。第四百七十一願、入等活地獄代受苦願。第四百七十二願、出八寒等地獄生人天願。第四百七十三願、出畜生生人天願。第四百七十四願、入畜生道代受苦願。第四百七十五願、出鬼類生人天願。第四百七十六願、入餓鬼界代受苦願。第四百七十七願、出阿修羅生人天願。第四百七十八願、入惡趣代受苦願。第四百七十九願、人界證菩提願。第四百八十願、生人界代受苦願。第四百八十一願、諸天得不退轉願。

第五項、現前乞二其顯證明一。

第四百八十二願、請諸佛證明願。第四百八十三願、大會感

涙願。

第六項、願二未來現益一。

第四百八十四願、受者無損誓。第四百八十五願、歡喜布施誓。第四百八十六願、布施不求果願。第四百八十七願、禁戒不犯誓。第四百八十八願、忍辱不退誓。第四百八十九願、精進無退誓。第四百九十願、禪定不動轉誓。第四百九十一願、般若不生分別誓。第四百九十二願、布施無緣誓。第四百九十三願、小善菩提誓。第四百九十四願、弟子袈裟誓。第四百九十五願、四衆尊重三寶誓。第四百九十六願、異類貴袈裟願。第四百九十七願、異類見袈裟願。第四百九十八願、袈裟濟飢願。第四百九十九願、袈裟脫危願。第五百願、袈裟脫兵誓。

以上五百條の誓願文の意を取つてその略名を記したのであるが、これによつてその內容構成の如何なるものであるかを窺い知ることが出來るであらう。南都の諸師の間に於ては、平安期末から鎌倉期にかけて、本經所說の菩薩行願の敎が受容せられ、多くの淸涼寺式釋迦如來像の模刻がなされ、多數の道俗によつて結緣信仰されて行くのであるが、その根柢に釋迦如來五百大願經二卷、として成立して行つたものと考へられる。それはその頃漸く盛になつた淨土敎に對抗して成立したものとも考へられるが、他面時代の要求であり、中世社會の中に受けとめられねばならぬ必然的所產であつたとも考えられる。蓋し、その成立は釋迦如來をどこまでも人格的活動的佛として把握し、やがては佛徒としての主體性の自覺に於て、人間關係を革新せしめんとした事に於て、その意義を認めねばならぬと思ふ。

1 拙著「鎌倉期南都師の釋迦如來觀と穢土成佛說の受容について」(印度學佛敎學研究第十一卷二号所收)。同「鎌倉期南都諸師の太子觀」(印度學佛敎學研究、第十二卷第二号所收)。參照

2 明行尼は明達、性明、眞覺、戒光、禪惠、理證、信戒等と共に承久の變に戰沒した官軍將士の妻妾の中の一人である。辻善之助著、日本佛敎史中世篇之一、第四節參照。

3 三崎良周氏著「神佛習合思想と悲華經」(印度學佛敎學研究、第九卷第一號)には、覺禪鈔に引用されているので、平安末期には作られていたとされている。

4 拙著「大悲山峯定寺藏釋迦像と貞慶」(佛敎大學學報第九號所收)參照

5 龍谷大學圖書館藏、寬文十年八月、秋田屋淸兵衛板行本による。

6 大文、生死の結緣を願ふの部の願文は高山寺本には該當する願文がない。

7 戶部隆吉著「鎌倉時代に於ける嵯峨釋迦像模刻の流行と釋迦念佛」(日本佛敎美術之研究所收)參照

(文部省科學研究費成果の一部)